

【論文】

対人援助専門職の心がけに関する学び合いと省察

新川 泰弘*

Collaborative and Reflective Learning about Consciousness by Human Services Professionals

Yasuhiro Niikawa

要 旨

本研究の目的は、対人援助専門職がソーシャルワーク実践理論・定義・原則に関する講義における学び合いと省察について検討することであった。そこで、社会福祉研修センター主催の対人援助研修で専門職が受講した講義における学び合いと省察について検討するため、講義前後に提出されたレポート内容を分析した。本研究の結果、講義後に、「ニーズの把握」「制度・サービスへつなぐ」といったソーシャルワークの機能や役割に関する内容が見受けられた。また、講義前後で共通して、専門職が、対人援助場面において、「利用者の立場に立って共感的態度で傾聴する姿勢」を心がけるべきと内容が得られた。そして、学び合いと日々の実践の省察によってこれらの成果を得たことが示唆された。

Abstract

This study analyzes the results of collaborative and reflective learning among human services professionals with regard to practice theory and the definitions and principles underlying the social work rendered by the participants. A social welfare training center recruited professionals who wanted to learn about human services. The participants wrote reflection notes on their collaborative and reflective learning during a human services course on social work. In this study, participants' reflection notes before and after undergoing learning, and their learning outcomes on the basis of these reflection notes were examined. Through the course, they learned keeping in mind the client's needs, the professionals understood the relationship between social work systems and services and the function and role of social work. And, the professionals understood the importance of being empathetic listeners before and after their collaborated learning. It was observed that the professionals implemented their learning from the course in their daily practice.

● ● ○ **Key words** 対人援助 Human Services／専門職 Professional／省察的な学び合い collaborative and reflective learning／心がけ Consciousness／ソーシャルワーク Social Work

受付日 2016. 9. 20 / 受理日 2017. 1. 28

*関西福祉科学大学 教育学部 准教授

I. 研究の背景

芝野（2015）は、対人援助やソーシャルワーク実践において得られる発見や成果について「援助手続きの実践がクライアントとのコミュニケーションの中でどのように理解され受け入れられたのか、あるいは受け入れられなかったのか、特定のクライアントの特質と援助との関係、援助手続きの再検討などなど、実践現場から得られる情報は多い」と述べており、援助手続きを検討して、実践現場から情報を得ることの重要性について論じている。また、芝野（2015）は、エビデンスを生み出す方法として認知されていない「経験」のみに基づく“practice wisdom”について、「経験によって得られた知識や技術は、できるだけ早く可視化しアカウンタブルなものとするために、より厳密なリサーチの対象とされる必要があるだろう」と述べており、有効性が実証されていない「経験」のみに基づく援助手続きを厳密なリサーチによってエビデンスとしての価値を高めることの重要性を指摘している。

対人援助専門職が経験を通して得た対人援助に関する知識や技術は、言語化されず、データ化もなされず、明らかにならないことがある。Polanyi（2003）は、こうした無意識的に行われている実践や言語化できない実践について「私は人間の知の再考をするにあたって、次なる事実から始めることにする。すなわち、私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」と述べている。また、Schön（1992）は、「研究者は、行為の中の知や実践の中の知を明らかにする研究を行う際、実践者が行為の中の省察や実践の中の省察をどのように行っているか解明していく必要がある。そのため、行為の中の省察の知を記述し、分析するために必要となる言語と枠組みの構造を研究することが求められる」と述べており、実践者が行為の中の省察や実践の中の省察をどのように行っているか解明していく研究を行うために、行為の中の省察の知を記述し、分析するために必要となる言語と枠組みの構造を研究する必要性を指摘している。それゆえに、暗黙のうちに、実践者が活用している省察の知を明らかにするための研究者と実践者の協同による研究が必要となる。

暗黙のうちに、実践者が活用している省察の知を明らかにするため、研究者と実践者が共同で、エビデン

スとしての価値を高めるため、リサーチによってテキストマイニングを行い、テキストデータを定量化して、暗黙のうちに、実践者が活用している省察の知を明らかにする研究の意義がこれまでの先行研究において指摘されている。

藤井（2005）は、実践者の記述したテキストデータを分析するテキストマイニングについて「テキストマイニングは新しい知の発見から仮説生成を行うという点ではアブダクションということができ、テキストという質的データを対象にする点では、質的研究の知の構築にも近いといえる」と述べており、テキストマイニングが、新たな知を発見するための分析法であると論じている。また、「データの分析に統計解析の手法を用いていることから、質的研究のように調査者の力量によって結果が異なるという信頼性の問題を解決している。その意味では量的研究の知の構築であるともいえる」とも述べており、テキストマイニングが、質的研究による信頼性の問題を克服している手法であることを指摘している。また、日和（2013）は、ソーシャルワーク研究におけるテキストマイニング活用について「普遍性や客観性を担保することにつながり、実証的な研究を行う場合には意義がある」と述べている。さらに、上野ら（2015）は、テキストマイニングの意義と特徴について「質的研究を可視化することは暗黙知の解明に大きな寄与があると考えられる。テキストマイニングは質的研究と量的研究のコラボレーションである」と論じている。また、山崎（2010）は、応用学としてのソーシャルワークについて「根本的な議論を重ねて行く必要を感じている。また、並行して、現場の実践を言語化したり議論化したりする作業にも取り組まなければならないと考える。その作業を通じて、初めて全体を見たり、政策提言を行ったりするソーシャルワークの強さ（独自性）が培われることになる」と述べており、ソーシャルワークの強さ（独自性）を培うために、現場の実践を言語化し、議論する意義を指摘している。

実践者が経験によって得た知識や技術を明らかにする研究は必要であり、テキストマイニングは、新たな知の発見に貢献する。また、質的研究法が有している信頼性の問題を克服し、実践を通して得た知や、講座や講義を通じた学びが省察にどの程度反映しているかを明らかにする可能性を秘めている。

しかし、実践者が、何を、どのように、何を目的として学んだのか、また、学んだことをどのように省察しているのか、といった点を明確にしなければ、学びによる省察の知は明確にならない。そのため、ソーシャルワーク実践の何を学び、その学びが省察にどの程度反映されているのかという点を明らかにする省察の知の研究が必要になる。

II. 研究目的

本研究においては、まず対人援助専門職が相談援助や面接・面談などこれまでの対人援助場面で最も心がけていたことについて省察し、学び合った結果を検討する。その後、対人援助としてのソーシャルワーク実践理論・定義・原則について学ぶ。その上で、ソーシャルワーク実践理論・定義・原則を学び合ったことが、専門職の省察にどの程度反映されていたか検証する。

III. 研究方法

1. 対象

A 社会福祉研修センター主催の対人援助の基本講座（以下、本講座とする）を受講した対人援助専門職 69 名であった。

2. 本講座の概要

本講座では、講義の前後において、5～6名の対人援助専門職がグループ単位で討議して学び合う活動を取り入れて実施した。その際、あらかじめグループ内に職位や年齢に偏りができないように、また、同じ職場の受講生が入らないようにグルーピングがなされた。そして、講義前に1時間かけて受講生である専門職が「相談援助や面接・面談などこれまでの対人援助場面で最も心がけていたこと」をテーマに討議し、学び合った。なお、討論テーマは口頭およびパワーポイントにて提示し、グループ内で司会、記録、発表者を選出した。そして、各グループで参加者は、討議テーマについて学び合い、日々の実践を省察した成果を自由記述レポートにまとめるとともに、全体の場におい

てグループ単位で順番に発表して、講座終了後に自由記述レポートを提出した。

その後、3時間に亘って講義を行った。まず、岩間（2014）によって構成要素と構造が研究され、その意義が明らかにされているソーシャルワーク実践の価値について学んだ。その後、岡村（1983）によって明示されたソーシャルワーク実践理論、国際ソーシャルワーカー連盟（International Federation of Social Workers : IFSW）（2000、2014）と芝野（2015）によるソーシャルワークの定義、Pumphrey（1959）によるソーシャルワークの動機、Biestek（2006）による七つの原則を通して、ソーシャルワーク実践理論・定義・原則について学んだ。

講義を終えた後に、1時間、再度グループで討議して学び合った。討議テーマは、専門職が、「ソーシャルワーク実践理論・定義・原則をふまえて、相談援助や面接・面談など今後の対人援助場面で最も心がけていきたいこと」であった。

講義終了後も講義前と同様、各グループの参加者同士で討議テーマについて学び合い、その成果を自由記述レポートに整理してまとめるとともに、全体の場で順番に発表して、講座終了後に自由記述レポートを提出した。

3. 日時

2015年7月7日（火曜日）10:00～16:00に実施した。

4. 学びの成果分析の方法

対人援助専門職の基本的属性として、性別、年齢、勤務年数、所属機関、職種を把握した。次に、講義前後で提出したレポートの記述を集計し、分析した。レポートの記述をコーディングし、統計分析する手続きにおいては、李（2005:76-93）によるテキストマイニングの実行例を参照して実施した。また、分析ソフトは、コーディングには IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を使用し、主成分分析及びクラスター分析には IBM SPSS Statistics 21 を用いた。コーディングにおいては、閾値 2 以上の名詞の単語のみを抽出して同種の語を置換した。なお、テキストマイニングによるテキスト分析には、解釈の幅があるという曖昧さがあるため、データの意味するところを意識して、原

文に帰りながら、3名の社会福祉専門職による協議を通してクラスターの命名を行った。

5. 研究の倫理的配慮

運営主体である A 社会福祉研修センター管理運営責任者及び研修担当責任者へ実践教育成果は匿名化した上ですべて統計解析して、プライバシーの漏洩がないようにデータを厳重に管理するとともに、研究目的と任意性の説明を行って了承を得た。また、対象者に対しても口頭で同様の説明を行って同意を得た。

IV. 結果及び考察

1. 基本属性

基礎的な属性の集計結果をみていく。性別は、男性 19名 (27.5%)、女性 50名 (72.4%)、計 69名であった。年齢構成は 10代 5名 (7.2%)、20代 42名 (60.8%)、30代 9名 (13.0%)、40代 9名 (13.0%)、50代 3名 (4.3%)、60代 1名 (1.4%) であった。

現職の経験年数は、1年未満 52名 (75.4%)、1年～3年未満 11名 (15.9%)、3年～6年未満 3名 (4.3%)、6年～10年未満 1名 (1.4%)、10年～15年未満 1名 (1.4%)、無記名 1名 (1.4%) であった。福祉職場の経験年数は、1年未満 44名 (63.8%)、1年～3年未満 8名 (11.6%)、3年～6年未満 5名 (7.2%)、6年～10年未満 4名 (5.8%)、10年～15年未満 1名 (1.4%)、無記名 7名 (10.1%) であった。分野は、高齢者福祉 28名 (40.6%)、障害者福祉 31名 (44.9%)、児童家庭福祉 5名 (7.2%)、社会福祉協議会 5名 (7.2%) であった。職種は、相談員 6名 (8.7%)、介護職・指導員 57名 (82.6%)、事務職 1名 (1.4%)、管理者 1名 (1.4%)、その他 4名 (5.8%) であった。

2. 「これまでの対人援助場面で最も心がけていたこと」についての学び合いと省察

講義を行う前までに本講座を受講する対人援助専門職が「これまでの対人援助場面で最も心がけていたこと」に関するレポートの記述は、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を用いて類似の語句をコーディングした。

全構成要素 134 に対して、名詞の単語のみを抽出し

て同種の語を置換し、閾値 2 以上の構成要素 20 を特定した。なお、構成要素の出現頻度は、利用者 26 (65%)、目 8 (20%)、言葉遣い 8 (20%)、気持ち 7 (17.5%)、話 6 (15%)、雰囲気 5 (12.5%)、視線 4 (10%)、立場 4 (10%)、対応 4 (10%)、傾聴 3 (7.5%)、自分 3 (7.5%)、受容 3 (7.5%)、笑顔 3 (7.5%)、共感 3 (7.5%)、信頼関係 3 (7.5%)、挨拶 2 (5%)、顔 2 (5%)、聞いていること 2 (5%)、緊張 2 (5%)、否定 2 (5%) であった。

そこで、学びの全体像を把握するため、コーディング結果を主成分分析で得た成分負荷行列に、クラスター分析 (抽出法にワード法、測定方法に平方ユークリッド距離による) を施したところ、図 1 に示したクラスター分析の結果を得た。

図 1 に示したクラスター分析結果から、クラスターとして解釈できそうな距離を 20 と判断して、表 1 の 3 グループを抽出した。その後、クラスター分析結果に基づいて、データの意味するところを意識しながら、原文を参照しつつ、クラスターの命名を行った。その結果、3つのグループが得られた。

1 グループとして「自分から笑顔で挨拶する」が得られた。また、2 グループとして「緊張しないように対応しながら利用者の話を傾聴し、気持ちに共感して受容する」が得られた。さらに、3 グループとして「利用者の顔や目を見ながら視線を合わせて話を聞いている雰囲気を作る。また、信頼関係を築くため、利用者の立場や話を否定せずに言葉遣いにも気をつける」が得られた。

3. 「今後の対人援助場面で最も心がけていきたいこと」についての学び合いと省察

ソーシャルワーク実践理論・定義・原則について講義を受け、「今後の対人援助場面で最も心がけていきたいこと」に関するレポートの記述は、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を用いて類似の語句をコーディングした。

全構成要素 129 に対して、名詞の単語のみを抽出して同種の語を置換し、閾値 2 以上の構成要素 22 を特定した。なお、構成要素の出現頻度は、利用者 11 (27.5%)、対人援助 10 (25%)、思いやり 9 (22.5%)、気持ち 8 (20%)、原則 7 (17.5%)、大切 5 (12.5%)、話 5 (12.5%)、ニーズ 5 (12.5%)、意識 3 (7.5%)、

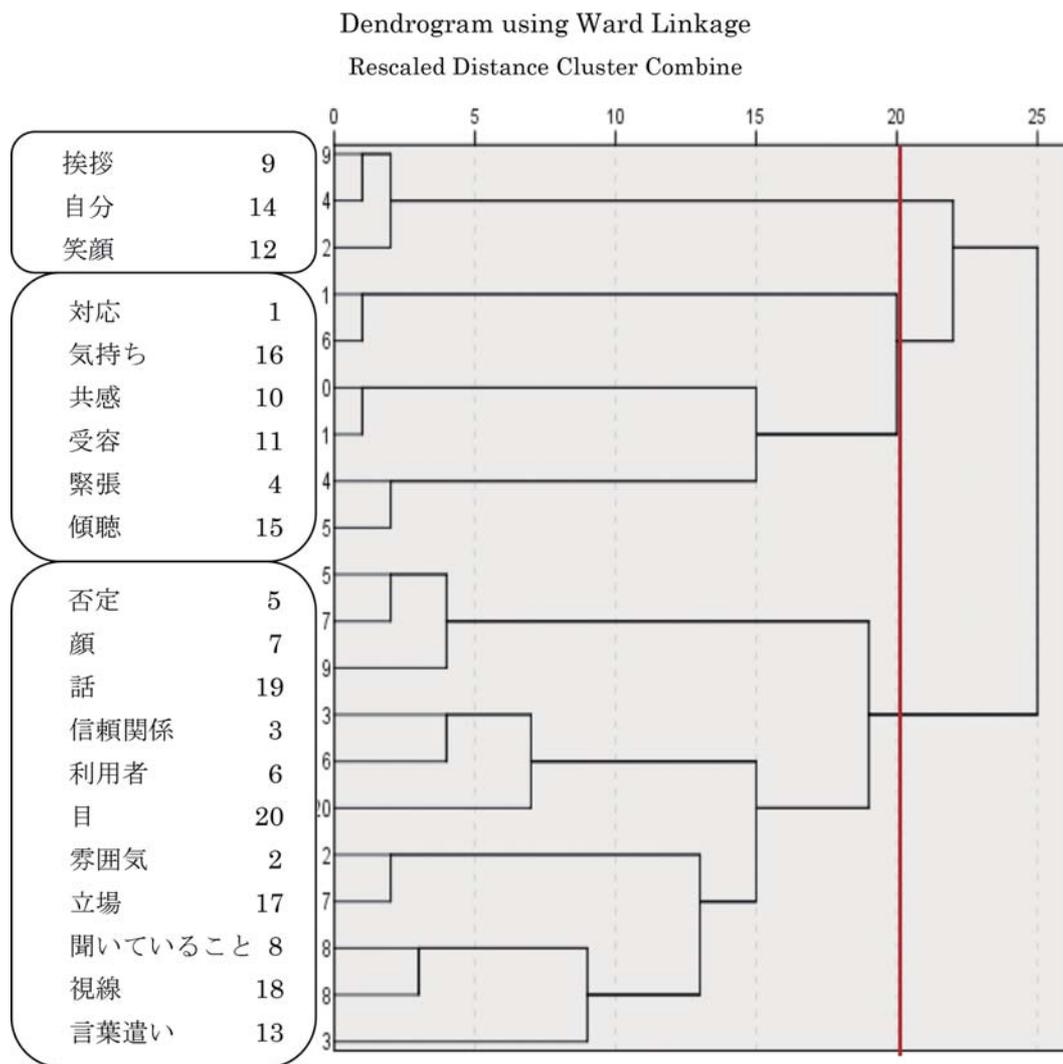


図1 これまでの対人援助場面で最も心がけていたことのクラスター分析結果

表1 これまでの対人援助場面で最も心がけていたこと

1. 自分から笑顔で挨拶する
2. 緊張しないように対応しながら利用者の話を傾聴し、気持ちに共感して受容する
3. 利用者の顔や目を見ながら視線を合わせて話を聞いている雰囲気を作る。また、信頼関係を築くため、利用者の立場や話を否定せずに言葉遣いにも気をつける

サービス3 (7.5%)、知識3 (7.5%)、専門職3 (7.5%)、立場3 (7.5%)、一人3 (7.5%)、中2 (5%)、制度2 (5%)、傾聴2 (5%)、個別2 (5%)、自分2 (5%)、相談2 (5%)、問題2 (5%)、共感2 (5%)であった。

そこで、学びの全体像を把握するため、コーディング結果を主成分分析で得た成分負荷行列に、クラスター分析（抽出法にワード法、測定方法に平方ユークリッド距離による）を施したところ、図2に示したクラスター分析の結果を得た。

図2に示したクラスター分析結果から、クラスターとして解釈できそうな距離を20と判断して、表2の

3グループを抽出した。その後、クラスター分析結果に基づいて、データの意味するところを意識しながら、原文を参照しつつ、クラスターの命名を行った。その結果3つのグループが得られた。

1グループとして「専門職としての知識と意識を持ち、個別に一人ひとりの問題と向き合う。相談を行う際、思いやりを持って、傾聴して、制度・サービスとつなぐ実践をする」が得られた。また、2グループとして「対人援助の原則を大切にする」が得られた。そして、3グループとして「利用者の立場に立って共感的態度で話を聴き、ニーズを把握する」が得られた。

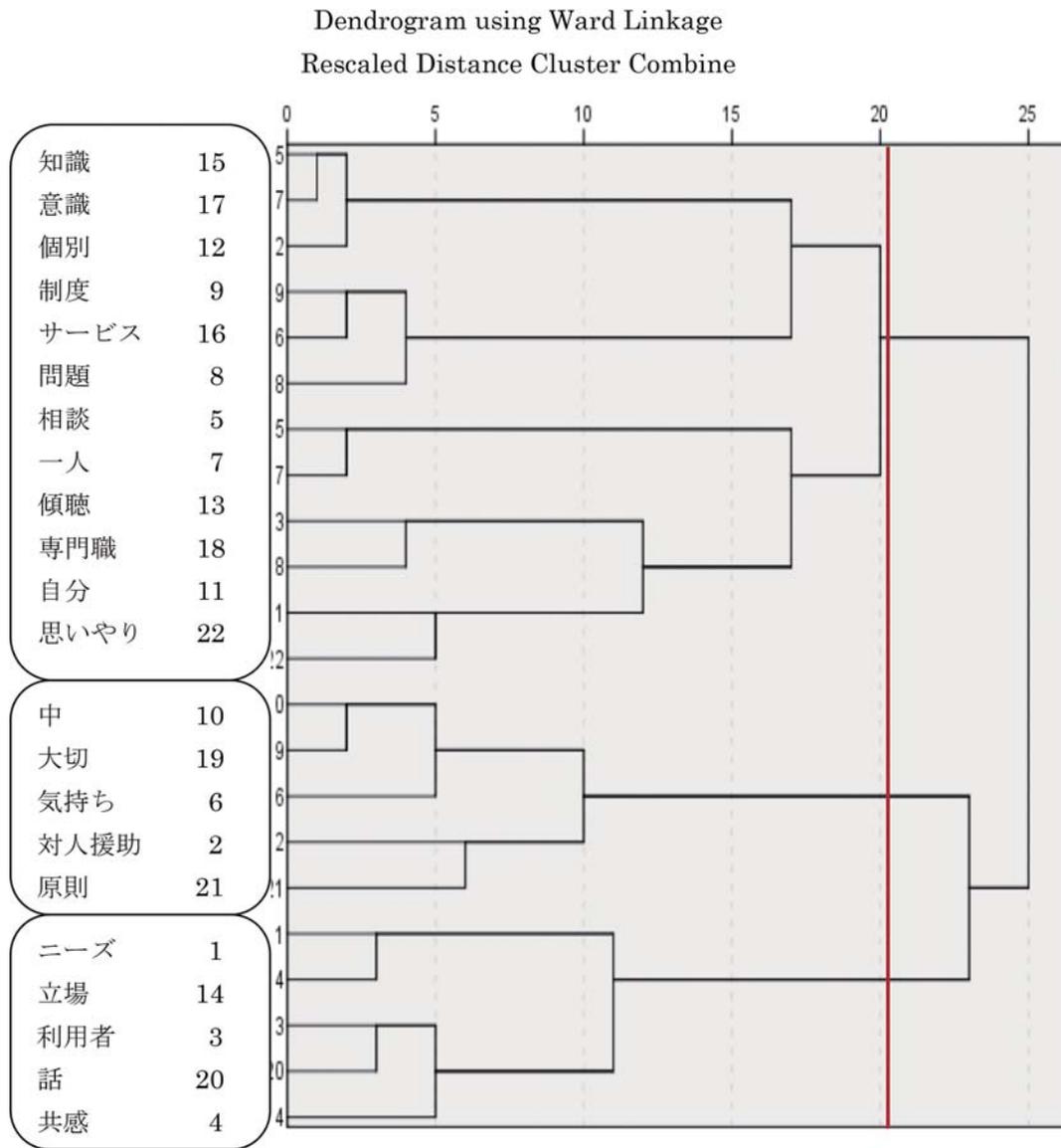


図2 今後の対人援助場面で最も心がけていきたいことのクラスター分析結果

表2 今後の対人援助場面で最も心がけていきたいこと

- | |
|---|
| 1. 専門職としての知識や意識を持ち、個別に一人ひとりの問題と向き合うまた、思いやりを持って、傾聴しながら相談に応じ、制度・サービスとつなぐ実践をする |
| 2. 対人援助の原則を大切にすることで利用者の気持ちを知り、受け止める |
| 3. 利用者の立場に立って共感的態度で話を聴き、ニーズを把握する |

4. ソーシャルワーク講義前後の学び合いと省察

ソーシャルワーク実践理論・定義・原則に関する講義内容と講義後のレポート内容を比較検討するとともに、講義前後のレポート内容を比較検討した。

講義内容と講義後のレポート内容を比較検討したところ、講義で学んだ岩間（2014）によるソーシャルワーク実践の価値、岡村（1983）によるソーシャルワーク実践理論、IFSW（2000、2014）と芝野（2015）によるソーシャルワークの定義、Biestek（2006）による

七つの原則の中でも、講義後には、「専門職としての知識や意識を持つ」「制度・サービスとつなぐ」「ニーズを把握する」といった岡村（1983）によるソーシャルワーク実践理論、IFSW（2000、2014）と芝野（2015）によるソーシャルワークの定義に関する内容が確認された。また、Pumphrey（1959）によるソーシャルワークの動機と関連した「思いやり」や、Biestek（2006）による七つの原則の一部と関係した「対人援助の原則を大切にする」「個別に一人ひとりの問題と向き合う」「傾聴しながら相談に応じ」「利用者

の立場に立って共感的態度で話を聴き」があるとともに、岩間（2014）によるソーシャルワーク実践の価値の一部とも関連した「利用者の立場に立つ」も得られた。

講義前だけに出現した構成要素には、目8（20%）、言葉遣い8（20%）、雰囲気5（12.5%）、視線4（10%）、対応4（10%）、受容3（7.5%）、笑顔3（7.5%）、信頼関係3（7.5%）、挨拶2（5%）、顔2（5%）、聞いていること2（5%）、緊張2（5%）、否定2（5%）があった。また、講義前のクラスターには講義後のクラスターには見受けられない「自分から笑顔で挨拶する」「緊張しないように対応」「利用者の顔や目を見る」「視線を合わせて話を聞いている雰囲気を作る」「信頼関係を築く」「利用者の立場や話を否定せずに言葉遣いにも気をつける」が出現した。

このように講義前には、対人援助の基本的態度・姿勢、技術よりも、社会人としての基本的な心得である挨拶、言葉遣い、笑顔、礼儀に関するレポートの記述がより多く見受けられた。この結果が得られた背景として、受講生の中でも新任研修を受けていると考えられる1年未満52名（75.4%）の対人援助専門職の割合が多いことの影響と推察された。

一方、講義後だけに出現した構成要素には、対人援助10（25%）、思いやり9（22.5%）、原則7（17.5%）、大切5（12.5%）、ニーズ5（12.5%）、意識3（7.5%）、サービス3（7.5%）、知識3（7.5%）、専門職3（7.5%）、一人3（7.5%）、中2（5%）、制度2（5%）、個別2（5%）、相談2（5%）、問題2（5%）、共感2（5%）があった。また、講義後のクラスターには講義前のクラスターには見受けられない「専門職としての知識や意識を持つ」「個別に一人ひとりの問題と向き合う」「制度・サービスとつなぐ」「対人援助の原則を大切にする」「ニーズを把握する」が出現した。

この結果は、講義後には、講義の中で学んだソーシャルワーク実践理論・定義・原則の中でも、専門職としての知識と意識、個別化、制度とサービスをつなぐ実践、対人援助の原則、ニーズ把握について学び合い、省察していたことを示唆しているものと思われる。

しかし、こうした自由記述がどのような文脈で出現しているかまではクラスター分析では明らかにならない。そのため、データが導かれた文脈が肯定的な文脈

であるか、否定的な文脈であるかという点についても詳細に分析、検証する研究が必要になる。このことは本研究の限界であり、今後の課題である。

次に、ソーシャルワーク講義前後における共通点について検討した。共通して出現した構成要素には、利用者、気持ち、話、立場、傾聴、自分、共感があった。この結果から、利用者、気持ち、話、立場、傾聴、自分、共感といった事柄について、講義前後で変化がないことがわかった。そこで、クラスター分析結果の共通点に着目して検討した。その結果、講義前の「利用者の話を傾聴し、気持ちに共感して受容する」は、講義後の「傾聴しながら相談に応じ」および「利用者の立場に立って共感的態度で話を聴き」とほぼ同じ意味であった。結果として、「利用者の話を最後までしっかり聞き、何を必要として、何をしようとしているのか、思いを受け止めて、共感する」「利用者の話を傾聴し、共感的態度で話を聴く」についての心がけに関して、講義前後で共通して、学び合い、省察していたことを示唆した。

武田ら（1996）は「ソーシャルワーカーが、他の専門職（医師、看護婦）と比較して、クライアントおよび家族（この場合は妻）の感情表出を意図して面接を行う割合が高いということがわかった。また、医師・看護婦では、社会資源の活用（妻の処遇）を第一義的に意図したかわりを行う割合が高いということがわかった」と述べており、福祉専門職の方が医師や看護師よりも、クライアントや家族の感情表出を第一に考えるべきであると考えていることを明らかにしている。本研究における講義では、傾聴、受容、共感的態度という内容を中心に学んだのではなく、ソーシャルワークの価値、原則、機能、役割を学んだ。しかし、本研究においても、武田ら（1996）の研究で実証された結果と同様に、対人援助において、利用者の話を傾聴し、気持ちに共感して受容することや、利用者の立場に立って共感的態度で話を聴くことを、講義前だけでなく、講義後においても、今後の対人援助場面で心がけていきたいと考えていたことが示唆された。

V. まとめと今後の課題

久保（2010）は、ソーシャルワーク教育における反

省的実践の必要性について、「自分が知っていることを新たに反省し、すでに確定した理論や技術のカテゴリーに依存するのではなく、固有の事例についての新たな理論を形成していく反省的実践が求められている」と述べている。また、Schön (2001) は、研究者と実践者との共同による研究に関して、行為の中の省察に関する研究を行う上で、研究者と実践者とのパートナーシップに基づいた研究が不可欠である点を指摘している。

本研究の結果、講義後には、講義で学んだニーズの把握、制度・サービスへつなぐといったソーシャルワークの機能や役割を含めたソーシャルワーク実践理論・定義・原則について学び合い、省察していたことを示唆しているものと思われた。そして、講義前後で共通していた点に着目すると、対人援助場面において、利用者の立場に立って共感的態度で傾聴することの心がけについて共通して学び合い、省察していたことを示唆しているものと考えられた。なお、受講生の中で、新任研修を受けていると考えられる1年未満52名(75.4%)の対人援助専門職の割合が多いことは、本研究の結果が得られた結果に影響を及ぼしているものと思われる。さらに、本研究結果は、あくまでも本講座を受講した対人援助専門職の学び合いと省察について検討することに目的が限定されたため、研究成果を一般化することはできない。

藤井 (2005) は、テキストマイニングの限界について「テキストマイニングは、テキストの分析をパーフェクトに行うものだという前提で行うものでない」と述べている。それゆえに、テキストマイニングの限界をふまえて、データに常に立ち返りながら、省察の知の研究に取り組んでいく必要がある。そして、本研究では明らかにできなかった職種、年齢、経験年数、地域差などさまざまな要因との関連性についての詳細な検討を行われなければならない。こうした点は、本研究の限界であり、今後の課題である。

なお、大島 (2015) は、「福祉実践現場に『プログラム開発と評価』の方法論を幅広く根づかせ、実践家参画型で効果モデルを構築する文化的土壌(含・評価文化)を醸成することを、将来のSW実践と教育・研究の姿として強く期待したい」と述べており、実践家参画型で進めるプログラム開発と評価の重要性を指摘している。また、芝野 (2011) は、実践モデル開発

における研究者と実践者の協働について「実は、実践モデルの開発は、さまざまな理論やソーシャルワーク実践理論から演繹されるだけでなく、実践モデルを作る研究者や実践家の価値観や日常の体験や経験、そして実践経験、さらに実践で協働する他の専門職の意見、加えて利用者との協働から得られるフィードバックといったさまざまな要素が関わっている」と述べており、研究者と利用者との協働とともに、研究者と実践者による協働の意義を指摘している。

それゆえに、本研究の成果を手がかりとして、リサーチに取り組むことが今後の課題となる。経験によって得られた知識や技術を可視化し、有効性を実証するために、本研究で得られた成果に基づいて、厳密な量的調査研究に取り組むことによってソーシャルワーク実践教育モデルを研究開発することも今後の課題である。

謝辞

本研究に協力いただきました対人援助専門職の皆様及び職員の皆様方に感謝申し上げます。なお、本研究は科研費(基盤研究C)「反省的研究から実証的研究へ架橋するファミリーソーシャルワーク実践教育モデル開発」(課題番号16K04222)の助成を受けました。

文献

1. Biestek, F. P. (1957) THE CASEWORK RELATIONSHIP, Loyola University Press. (=2006, 尾崎新・原田和幸訳『ケースワークの原則-援助関係を形成する技法』誠信書房.)
2. 藤井美和 (2005) 「第1章テキストマイニングと質的研究」藤井美和・小杉考司・李政元『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規, 14-27.
3. 日和恭世 (2013) 「ソーシャルワーク研究におけるテキストデータ分析に関する一考察」『評論・社会科学』106, 141-155.
4. 岩間伸之 (2014) 「ソーシャルワーク実践における『価値』をめぐる総体的考察-固有性の根源を再考する-」『ソーシャルワーク研究』40(1), 15-24.
5. 久保美紀 (2010) 「第13章ソーシャルワークにおける教授法-総論・各論の教授法」ソーシャルワーク研究所監修, 北川清一・佐藤豊道編『ソーシャルワークの研究手法-実践の科学化と理論化を目指して』相川書房, 217-238.
6. 岡村重夫 (1983) 『社会福祉原論』全国社会福祉協議会.
7. 大島巖 (2015) 「ソーシャルワークにおける『プログラム開

- 発と評価』の意義・可能性, その方法-科学的根拠に基づく支援環境開発と実践現場変革のためのマクロ実践ソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』40(4), 相川書房, 5-15.
8. Polanyi, M. (1966) *The Tacit Dimension*, New York: Doubleday and Company, Inc. (=2003, 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩新書.)
 9. Pumphrey, R. E. (1959) *Compassion and protection: Dual motivation in social welfare*, *Social Service Review*, 33, 21-29.
 10. 李政元 (2005) 「第5章『茶釜』とExcelを使って多変量解析用データをつくる-アンケート調査からみえてくる介護保険制度がもたらした介護施設現場の変化」藤井美和・小杉考司・李政元『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規, 76-93.
 11. Schön, D. A. (1984) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action*, Basic Books. (=2001, 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵-反省的実践家は行為しながら考える』ゆみる出版.)
 12. Schön, D. A. (1992) "The theory of inquiry: Dewey's legacy to education", *Curriculum Inquiry*, 22(2), Publisher: Blackwell Publishing on behalf of the Ontario Institute for Studies in Education/University of Toronto, 119-139.
 13. 芝野松次郎 (2015) 『ソーシャルワーク実践モデルのD&D-ブラグマティック EBPのためのM-D&D』有斐閣.
 14. 芝野松次郎 (2011) 「ソーシャルワークの実践と理論をつなぐもの-実践モデル開発のすすめ」『ソーシャルワーク学会誌』23, 1-17.
 15. 武田加代子・南彩子・杉本照子 (1996) 「ソーシャルワーク実践における価値-医師・看護婦・ソーシャルワーカーの比較調査から-」『社会福祉学』37(2), 101-115.
 16. 上野栄一・川野雅資 (2015) 「テキストマイニングの基礎と応用-暗黙知から臨床知への挑戦-」『福井大学医学部研究雑誌』15(1), 1-18.
 17. 山崎美貴子 (2010) 「第1章ソーシャルワーク研究の世界の新たな発見」ソーシャルワーク研究所監修, 北川清一・佐藤豊道編『ソーシャルワークの研究方法-実践の科学化と理論化を目指して』相川書房, 1-14.